

鳥取県芝振興ビジョン

～需要に応じた細やかな対応のできる芝産地を目指して～



平成23年3月

鳥取県芝生産指導者連絡協議会

鳥 取 県

鳥取県芝振興ビジョン
～需要に応じた細やかな対応のできる芝産地を目指して～

はじめに

鳥取県の芝生産は、昭和33年に東伯町（現琴浦町）の12戸の農家が、1haで試作したのが始まりです。当時、東伯町の主要畑作物は澱粉甘藷と養蚕で、農家の生活は大変厳しいものでした。そんな中で芝を植え始めた当初は、「畑に草を植えて、何が銭になる」と笑われながらの試作だったようです。

鎌を使つての収穫作業は大変な重労働で、除草剤の知識もなく芝畑が雑草だらけになるなど苦勞の連続でしたが、試作の結果は上々で、甘藷が10アール当たり1万5千円の時代に、芝の販売代金は7万円と、期待どおりの高収入が得られたことから、栽培熱が一気に広がりました。

その後、東京オリンピック（昭和39年）や万国博覧会（昭和45年）、ゴルフ場の建設ブームや公共事業の増加等を追い風に、転作水田でも栽培が始まり、平成4年のピーク時には栽培面積1510ha、販売額45億円にまで増加しました。

昭和43年には、さらに高品質な芝の生産をするために、生産組合、農協、町、県をメンバーとする「鳥取県芝生産指導者連絡協議会」が組織され、生産技術の高度化や機械化が推進されました。また、昭和44年には園芸試験場に芝試験ほ場が設置され、研究が開始されました。

昭和53年からは、全国に先がけ、系統選抜に着手したことも、高品質な芝生産に大いに貢献しました。選抜された芝を用いて生産組合が原種ほ場を作り、混入のない種芝をもとに生産が行われてきた結果、異品種の混じらない高品質な芝生産が行われています。

販売面では、生産者が販売組織を作つて生産から販売まで一貫して行う体制が作られ、そこから発展して芝張り工事やゴルフ場管理を行う事業者も現れ、計画的な販売や有利販売が可能となりました。

その後、景気の後退に伴いゴルフ場需要や公共事業需要が減少した結果、栽培面積はピーク時の56%に減少していますが、徹底した品質管理と会社組織・生産組合による積極的な販路開拓により、近年は需要が再び増加に転じ、生産量が不足する傾向にあります。

一方、平成14年に結成されたNPO法人グリーンスポーツ鳥取が「鳥取方式の校庭芝生化」を考案・普及活動を行った結果、全国に鳥取方式による校庭の芝生化が広がりつつあります。県としても、この動きを支援するため、平成21年度に県庁内に「鳥取方式の芝生化促進プロジェクト」を組織し、NPO法人と連携して、校庭や公園の芝生化を推進してきました。

しかし、この「鳥取方式の校庭芝生化」は、踏圧に強い洋芝（ティフトン）を用いており、ノシバやコウライシバが中心の芝産地からは、需要の増加につながらないことや、生産ほ場への洋芝の混入に対する懸念の声が寄せられていました。

そこで、全国で芝が見直されているこの機会をとらえて、園芸試験場で開発されたノシバ新品種「グリーンバードJ」を用いた校庭芝生化、芝産地の懸念を払拭するためのティフトンの特性調査、需要に即した芝品種の生産、鳥取県産芝のPR等の具体策を盛り込んだ「鳥取県芝振興ビジョン」を策定するものです。

このビジョンをもとに、関係者が連携して、鳥取県の芝産地の更なる発展を図りたいと思います。

鳥取県農林水産部長 鹿田道夫

目 次

1	鳥取県芝振興ビジョンの目的	1
2	鳥取芝の現状と課題	1
(1)	鳥取県における芝の生産概況	1
(2)	品質重視の芝生産	2
(3)	日本芝を中心とした品種構成	2
(4)	鳥取県オリジナル品種の育成	3
(5)	西洋芝の生産状況	4
(6)	鳥取芝の出荷・販売状況	4
(7)	鳥取芝の利用状況	5
(8)	鳥取芝の経営面と生産上の課題	6
3	鳥取県芝振興ビジョンの目指すべき方向	7
4	鳥取県芝振興ビジョンを実現するための取組	8
	【鳥取県芝振興ビジョン推進スケジュール】	9
(参考)	芝関係単県事業など	10



鳥取県芝振興ビジョン

～需要に応じた細やかな対応のできる芝産地を目指して～

1 鳥取県芝振興ビジョンの目的

鳥取県は、茨城県に次ぐ全国第2位の芝産地です。

本県の芝栽培の歴史は50余年と浅いのですが、組織的な指導体制と販売体制の構築により、急激に栽培面積を伸ばしました。現在、景気の後退により、最盛期に比べると栽培面積は減少していますが、品質の高い芝を生産する産地として高い評価を得ています。

一方、近年、ヒートアイランド現象の抑制等芝が環境に及ぼす効用が注目され、また、鳥取方式の校庭芝生化や競技場等スポーツターフとして西洋芝の需要が増加する等、新たな需要の拡大が見込まれています。

そこで、新たな需要に即した芝の生産、生産性の高い品種の導入、鳥取県産芝のPR等を行い、収益性の向上と需要拡大を図ることを目的に、鳥取県芝生産指導者連絡協議会と県が協力して「鳥取県芝振興ビジョン」を策定するものです。このビジョンは、鳥取県内で生産される芝「鳥取芝（とっとりしば）」の振興を図るため、平成22年度から26年度までの5年間の目標とします。

2 鳥取芝の現状と課題

(1) 鳥取県における芝の生産概況

本県の芝は、産出額約11億円と農業産出額の2%を占め、本県中西部黒ぼく地帯を代表する特産品の一つとなっています(図1)。全国第1位の茨城県とは大きく開きがありますが、全国第2位の栽培面積と出荷量、出荷額を誇っています(表1)。また、高品質の芝が生産されており、販売単価は茨城県を大きく上回っています。

本県での芝生産は、平成4年に1,510ヘクタールまで増加しましたが、景気の後退により、ゴルフ場や公共工事の需要が減少しました(図2)。平成10年には生産調整が実施され、芝跡地を遊休農地化しないよう、作付面積ピーク時の3割を目標に、野菜等へ作付品目の転換が図られました。

その後、販売単価の低下による収益性の低下や、生産者の高齢化等によりさらに

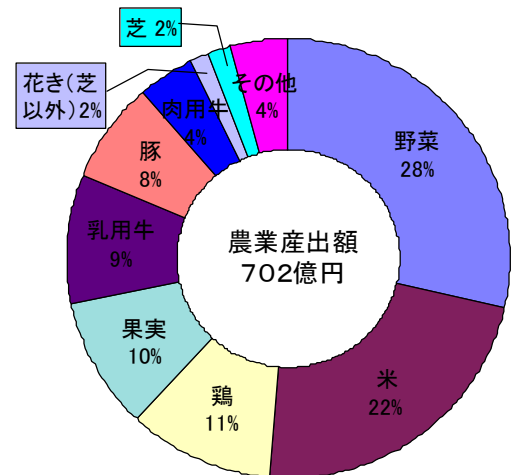


図1 鳥取県の農業産出額
(農林水産省「平成20年農業産出額」)

面積が減少し、平成20年には作付面積がピーク時の49%、産出額は27%にまで減少しました。しかし、現在、芝の環境に対する効果や、新たな需要の増加により、需要に対して生産が不足する状況にあります。

表1 全国の芝生産上位県(平成20年産)

(単位:ha、百万円)

作付面積順位	県名	作付面積	出荷数量	産出額
第1位	茨城県	3,680	2,940	3,000
第2位	鳥取県	856	578	1,333
第3位	静岡県	500	250	350
第4位	鹿児島県	488	361	635
第5位	宮崎県	326	260	713
全国計		6,498	4,862	6,874



資料：農林水産省生産局花き産業振興室
「花木等生産状況調査」

* 芝の出荷数量は面積(ha)で表す

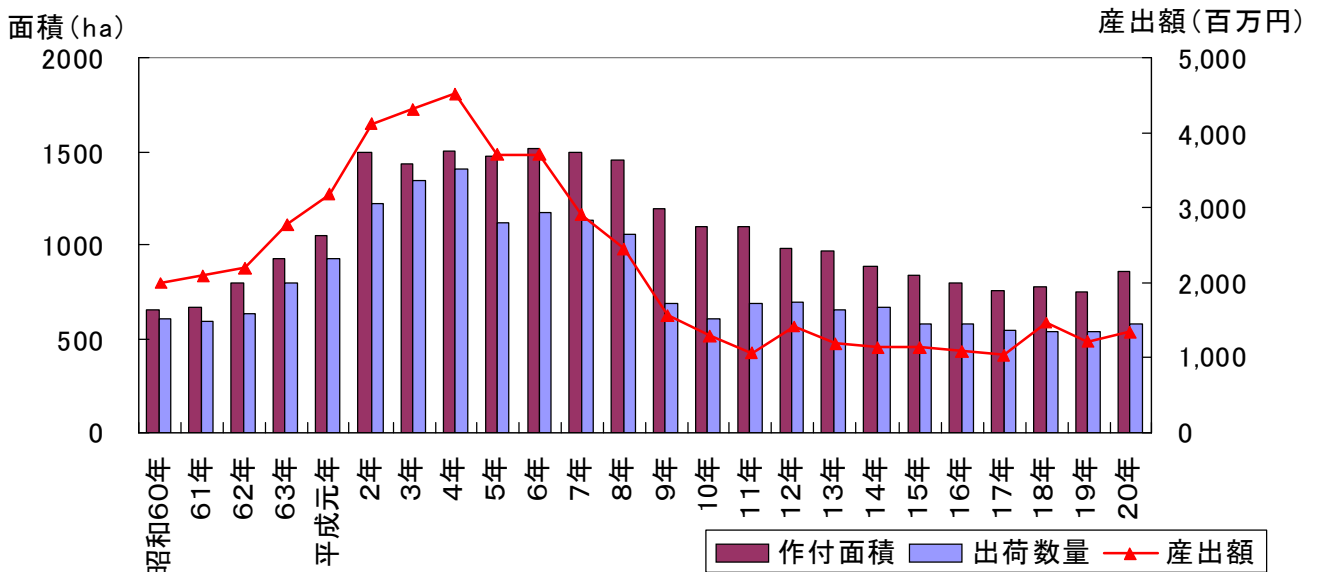


図2 鳥取県における芝の生産状況

(2) 品質重視の芝生産

昭和40年代、芝の生産量が増加するにつれ、生産者毎の品質格差が問題となりました。そこで、昭和43年に県(普及所、園芸試験場、農業専門技術員)、町、農協、生産組織をメンバーとする「鳥取県芝生産指導者連絡協議会」を組織し、産地が一体となって生産芝の高品質化に取り組むことになりました。

この協議会により、芝に関する現地調査を行い、栽培指針の作成、系統選抜、種芝圃場の指定等を行った結果、全国に誇れる高品質な芝の産地として評価されるようになりました。

(3) 日本芝を中心とした品種（種）^{しゅ}構成

本県では日本芝の作付面積が96%（平成20年）を占め、種（分類学上のしゅ）別にみると、ノシバが42%、コウライシバが40%を占めます（図3）。

コウライシバはゴルフ場や公園等に用いられ、栽培が比較的容易であり、製品率が高く、ほぼ毎年出荷できるので、生産者のメリットが大きい種です。

一方、ノシバは公共工事や河川敷等に安定した需要が見込まれますが、在来ノシバは生育量が少なく、出荷できる状態になるまでに時間がかかるので、①毎年出荷できない、②剥ぎ取り時に崩れ易く、出荷率が悪い等の理由で、栽培する生産者が少なく、供給量が不足しています。このため、生産性の高い品種の育成が求められていました。

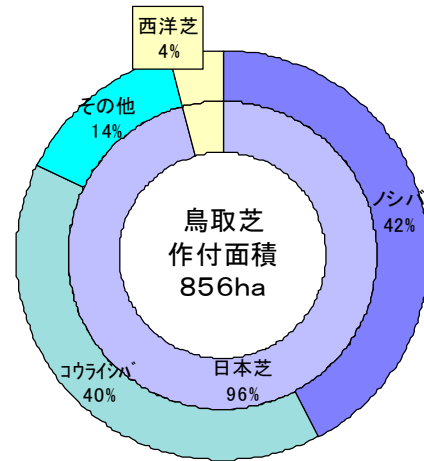


図3 鳥取芝の種別作付面積割合
（平成20年産）

(4) 鳥取県オリジナル品種の育成

「鳥取県独自の優れた品質の芝品種がほしい」との産地要望に応えるため、昭和59年に鳥取県園芸試験場で新品種の育成が始まりました。

県内各地の優良系統50系統を収集。これらを1～3代に渡って交雑を繰り返し、約500個体を獲得しました。この中から、ランナー（地を這うように伸びる茎）の生育量などを指標に50個体を選抜。さらに、平成12年からは日本芝の重要病害である葉腐病（ラージパッチ）に耐性がある3系統を選抜し、この中で実用性の高い1品種を、平成20年3月に「グリーンバードJ」として種苗登録申請されました。現在、県内の8生産組織が県の許諾を受け、増殖を始めています。

「グリーンバードJ」は、生育が旺盛で、年1回の収穫が可能なので、収益性の向上が見込まれます。また、利用場面では、葉が小さく、横に広がる特性を持つため、芝刈り管理の省力化が見込まれます。しかし、利用者（取引先）の知名度が低



いという課題があるので、今後は、品種特性を踏まえた利用場面の検討やPR広報が必要です。

鳥取県園芸試験場育成 ノシバ新品種「グリーンバードJ」

【グリーンバードJ育成の経過】

昭和59年に県内各地の在来系統を収集し、交雑してランナー（地を這うように伸びる茎）の生育量などを指標に選抜を行いました。平成12年からは葉腐病に強い系統を選抜し、平成18年には現地芝ほ場で実用性を評価して、平成20年3月に本品種を品種登録申請しました。

【グリーンバードJの特徴】

- (1) ランナーや根の生育量が在来系統の2倍以上と旺盛で、生産者は年1~2回の出荷が可能です。消費者はシバ張り後、シバ地の形成期間が在来系統の約2分の1に短縮できます。
- (2) 在来系統に比べ、葉長が短いことから、年間14~17回（生産者）必要だった芝刈り作業が半減でき、極めて省力的です。
- (3) 葉腐病菌の接種試験では、全く発病せず耐病性が高かったことから、葉腐病防除の省力化が期待できます。
- (4) 初冬期の紅葉は在来系統より遅く、春の萌芽は在来系統より早いことから、在来系統より長く鑑賞できます。



在来系統 グリーンバードJ

(5) 西洋芝の生産状況

本県の西洋芝は、ゴルフ場のグリーン等の需要に対応するため導入されましたが、栽培に手間がかかることから、作付面積4%と生産は極わずかに限られています。

一方、近年、生育が旺盛なバミューダ系の芝がスポーツターフとして注目されるようになりました。県内でも、一部生産組織がその需要を見越し、耕作放棄地等を活用してバミューダグラス‘ティフトン419’を生産し、国立競技場や味の素スタジアムに納入するなど、積極的な対応を行っています。

しかし、既存の芝産地は日本芝を中心に生産しており、また、混入のない均一な芝を生産する産地としての評価を受けていることから、繁殖力が旺盛なバミューダグラスの混入を懸念する声が寄せられていました。

バミューダグラスについては、生育特性や混入した場合の対応策など、明らかにされていない部分が多いので、県園芸試験場で調査を実施することとしています。

(6) 鳥取芝の出荷・販売状況

日本における芝の主な出荷先は、庭園・公園等を管理・運営する造園業者、法面・河川敷等の工事を行う土木業者、そしてゴルフ場です。芝は、市場流通、店頭販売等があまり行われず、出荷先からの注文に応じて収穫（剥ぎ取り）・出荷する方法が行われています。

本県では、販売を有利に進めるため、生産者が集まって生産から販売までを行う生産組合あるいは会社が組織されています。生産組合・会社は、販路開拓に苦慮しながら独自の流通体制を構築してきており、販売先は、関西を中心に関東から九州まで広く出荷されています。

しかし、この販売方法では、販売経費を抑えられる反面、一般消費者は芝の購入が難しく「どこで購入したらよいかわからない」との声が聞かれます。近年、ホームセンター等量販店での店頭販売やインターネットでの購入が可能ですが、流通量は極わずかなので、今後は小口販売を進めるため、梱包等の販売方法を検討する必要があります。

(7) 鳥取芝の利用状況

品質の高い鳥取芝は、ゴルフ場に多く使用され、平成9年まではゴルフ場用の出荷割合が50%以上ありましたが、近年、ゴルフ場の新設がなくなり、平成20年にはゴルフ場用が43%、土木用29%、造園用28%となっています（図4）。

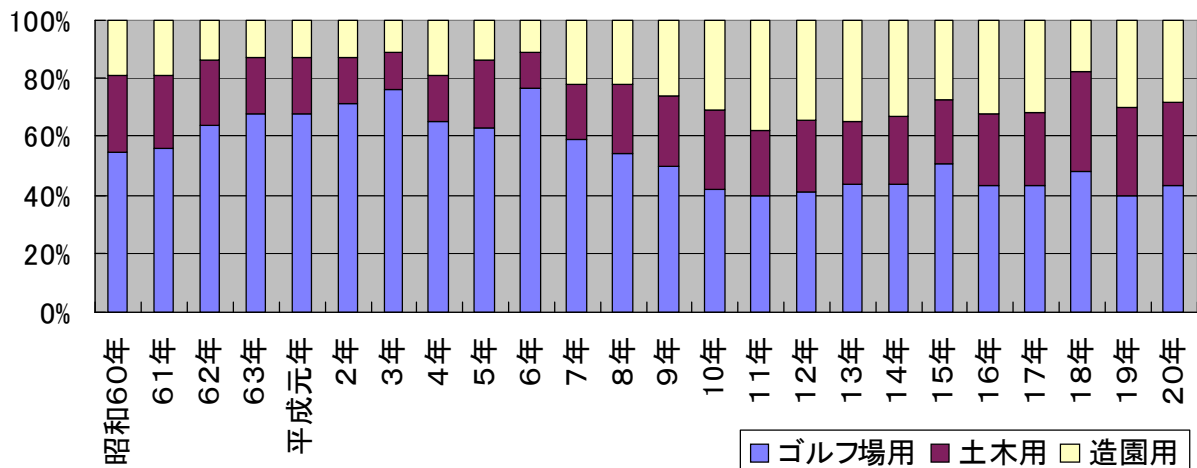


図4 鳥取芝の出荷用途の推移

近年、環境への影響や体力向上等の目的で校庭や競技場等の芝生化が進みつつあります。例えば東京都では、積極的に小学校の校庭芝生化が進められ、22万㎡の校庭が芝生化され（平成21年東京都教育委員会調べ）、大阪府では110校の公立小学校が芝生化されています（平成23年1月現在）。



東京都内小学校の校庭芝生化事例

(8) 鳥取芝の経営面と生産上の課題

平成5年頃まで芝の販売単価は、 m^2 当たり330円台を維持していましたが、平成7年頃から急激に低下し、平成11年には150円台/ m^2 となりました。しかし、平成20年は290円/ m^2 と、近年は回復傾向にあります(図5)。ただし、経営費の割合が高くなり、平成5年に43%であった所得率が、平成20年には23%と収益性が低下しています(鳥取県経営指導の手引きより)。

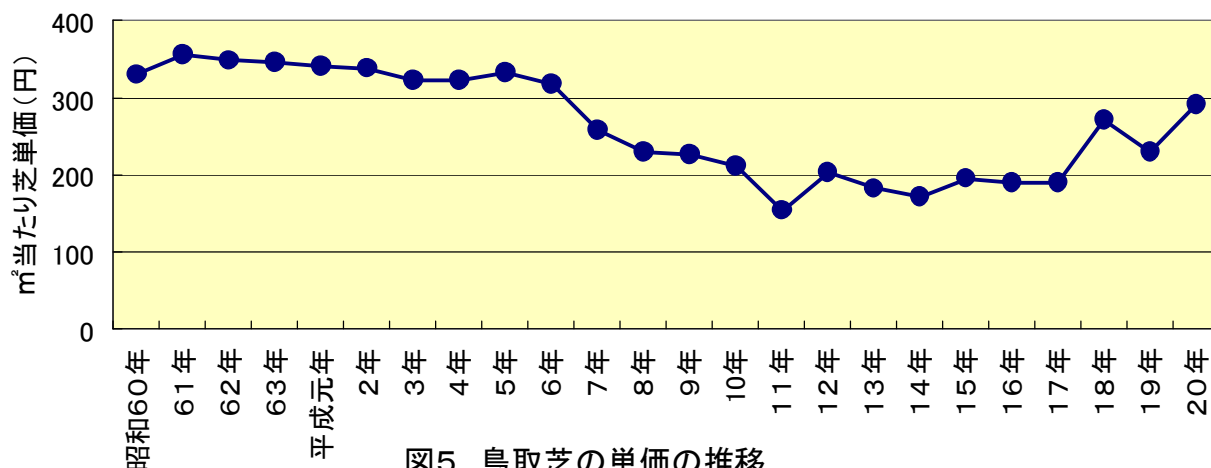


図5 鳥取芝の単価の推移

そこで、収益性向上のために、経営費の削減、生産性の高い芝品種の導入等を図る必要があります。しかし、品種更新を行うと1年ないし2年間出荷できない状態となるため、更新作業が進んでいません。

この他にも、以下のような生産場面での課題があります。

① 機械の老朽化

芝の生産に使用する芝刈機(アプローチモア)、芝掃除機(ローンスイーパー)等の芝専用機械の老朽化が進んでいるので、労力軽減のために、作業性の高い機械の導入が望まれます。

② 圃場の点在化

芝の生産が減少したことにより、芝圃場が点在化し、作業効率の悪化や、芝の除草剤等農薬が他の作物へドリフト被害を及ぼす可能性が増加する等の問題が懸念されているので、芝圃場の団地化を進める必要があります。

③ 芝残渣の活用

シバの頭刈りカス等の残渣処理は、現在、大部分が焼却処分されています。この残渣を堆肥化するなど、良質の有機物としての活用が望まれています。

④ 後継者の確保

生産者の高齢化が進んでいるので、新規・退職就農者を募るなど後継者づくりが必要です。

3 鳥取県芝振興ビジョンの目指すべき方向

(1) 鳥取芝の生産振興

ア 県オリジナル品種「グリーンバードJ」の普及促進

- ノシバの生産性向上を図るため、従来栽培していた在来ノシバを県オリジナル品種「グリーンバードJ」に更新します。

平成26年産の「グリーンバードJ」
作付目標面積100ha
(平成20年産ノシバ作付面積の約30%)

イ バミューダグラス「ティフトン」の生産環境の整備

- 「ティフトン」の品種特性を明らかにし、生産圃場のゾーニング等芝産地内のルールを策定することにより、需要に応じた「ティフトン」の生産を進めます。

ウ 省力・低コスト生産の実現

- 耐病性コウライシバ等、生産性の高い品種の育成・導入を進めることにより省力・低コスト生産の実現を目指します。
- 遊休農地を活用する等、芝圃場の集積・団地化を進め、作業効率の向上を図ります。
- 退職就農者、新規就農者を募る等新規生産者の確保に努め、生産量を増やすことにより、有利販売を目指します。
- 作業性の高い機械の導入を進め、労力削減に努めます。
- 芝頭刈り残渣の堆肥化等活用方法を検討し、資源循環を図ります。

(2) 鳥取芝の需要拡大

ア 校庭芝生化等販路の拡大

- 販路拡大を図るため、ゴルフ場、公園等に限られていた日本芝の利用場面を、校庭・一般家庭の庭等に広げます。
- 芝生の維持管理を一般化（容易に）するため、「芝生の管理マニュアル」を作成し、一般家庭等の芝生化を進めます。
- 一般消費者が購入しやすい販売システムの構築を進めます。

イ 鳥取芝の知名度向上

- 鳥取芝ブランドを県内外の一般消費者に知ってもらい、芝文化の定着、芝産業の振興を進めます。

4 鳥取県芝振興ビジョンを実現するための取組

項目	取組内容	関係機関			
		県	協議会	その他	
(1) 県オリジナル品種「グリーンバードJ」の普及促進					
生産振興	県事業により、園芸試験場において新品種「グリーンバードJ」の生育特性試験を行い、栽培技術指針の作成、利用場面の適否を確認します。	◎ 特性試験 指針作成	○ 指針作成		
	生産者大会を開催し、新品種の紹介、栽培方法の研修等を行います。	◎	△ 会の運営等	芝生産者	
	県立施設等での利用を進め、メディアで紹介する等、需要拡大に努めます。	○	○		
	(2) パミュダグラス「ティフトン」生産環境の整備				
	園芸試験場において、ティフトンの生育および混入メカニズム等品種特性を明らかにするとともに、ティフトン混入時の対処法等を実証し、ゾーニング等日本芝生産地内で生産する場合のルールを策定します。	◎ 特性試験	○ ルール策定		
	ティフトンポット苗生産を農福連携で委託生産する等、需要に応じた生産量の増大に努めます。	○	△	協議会員	
(3) 省力・低コスト生産の実現					
園芸試験場において耐病性コウライシバ等を育成、現地導入し、生産経費の削減を図ります。	◎	○ 技術指導等			
関係機関による検討委員会を組織し、①品種更新、機械更新等を進めるため、資金面での負担軽減を検討します。②芝頭刈り残渣等の活用について検討し、地域内循環を図ります。	○	○	検討委員会		
(1) 校庭芝生化等販路の拡大					
需要拡大	生育が旺盛な県オリジナル品種「グリーンバードJ」による校庭芝生化の可能性を明らかにし、販路拡大につなげます。	◎ 県委託事業	○ 技術指導等		
	シバ品種の特性検定試験、芝生事例研究の結果に基づき「芝生の管理マニュアル」を作成します。	◎	○		
	ホームセンター等量販店での店頭販売、インターネット販売、宅配等の一般消費者が購入しやすいシステムの構築に努めます。	○	◎		
	(2) 「鳥取芝」の認知度向上				
	「鳥取芝」を県内外に広くPRするため、パンフレット等PR用資材を作成します。	○ 県補助事業	◎		
	園芸資材展・商談会等に出展し、県オリジナル品種を中心とした販売促進を図ります。	○ 県補助事業	◎		
「鳥取芝」を一般消費者に知ってもらえるよう、広く情報を発信します。	◎	○			
県内農業高校、農業大学校等の生徒、学生に対して「鳥取芝」の出前講座を行い、全国第2位の産地を紹介します。	○	◎ 講師派遣			

◎：主 ○：副 △：協力等

【鳥取県芝振興ビジョン推進スケジュール】

項目	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
生産拡大対策					
新品種の特性検定試験					→
県オリジナル品種ノシバの生産拡大					→
耐病性コウライシバの育成	育成(園試)		品種登録申請	→ 産地導入	→
産地内ルールの策定			ルール策定	周知を図る	→
ポット苗の委託生産推進	←	→	定着を図る	→
機械等の更新		事業導入等検討	更新		→
頭刈り残渣活用		鳥取版活用法の検討	試験実施	周知	→
消費拡大対策					
校庭芝生化モデル事業	←	→			
PR資材の作成	←	→			
園芸資材展、商談会などに出展	←	→			
管理マニュアルの作成			マニュアル作成	マニュアル配布、周知を図る	→



〈鳥取県芝振興ビジョンを実現するための方策〉

鳥取芝の生産振興を図るため、単県事業を実施しています。

鳥取芝の利用促進事業

(H22～23 生産振興課)

鳥取県で生産される芝（鳥取芝）の需要拡大と利用促進を図るため、生産性の高い県育成ノシバ「グリーンバードJ」による校庭芝生化等新しい需要を開拓するとともに、需要動向に応じた生産体制の整備に取り組みます。

《校庭芝生化モデル事業》

- 日本芝新品種による校庭等芝生化（事業主体：県委託）
生育が旺盛な県オリジナル品種「グリーンバードJ」を校庭等に試験施工し、校庭等芝生化の可能性を探ります。
- 既存実施校の事例研究（事業主体：県）
県内外の校庭芝生化について事例研究を行い、芝品種毎に施工面、管理面での留意点を確認し、県オリジナル品種での校庭芝生化の可能性を探ります。
- バミューダグラスの特性検定試験（事業主体：県園芸試験場）
バミューダグラス「ティフトン」混入の防止技術を確立し、「ティフトン」と日本芝「グリーンバードJ」双方の生産拡大に取り組む環境を整えます。
 - 「グリーンバードJ」と「ティフトン」の生育比較
 - 「ティフトン」混入の可能性確認、混入時の対応策の策定
 - 除草剤効果確認

《鳥取芝PR事業》

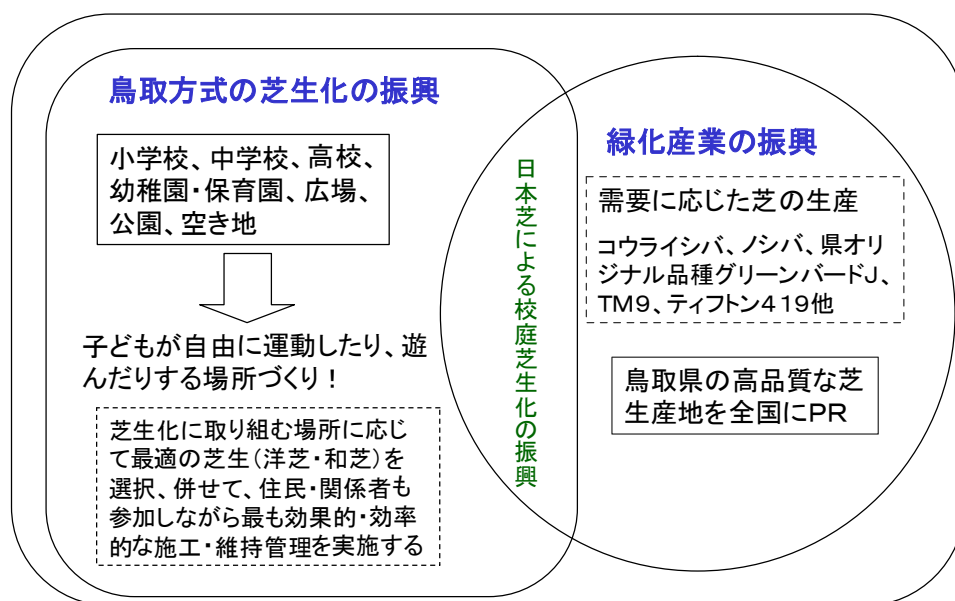
- 鳥取芝の認知度向上（事業主体：芝生産団体、鳥取県芝生産指導者連絡協議会）
鳥取芝の品質、生産について県内外にPRし、販路拡大と県産芝の利用促進を図ります。
 - 県内外向けPR資材の作成
 - 園芸資材展示・商談会等への出展

鳥取方式の芝生化プロジェクトチーム内での役割

- 校庭等踏圧の激しい場所での「グリーンバードJ」の使用可能性を確認することにより、日本芝による校庭芝生化を推進します。
- バミューダグラス「ティフトン」の品種特性を明らかにし、栽培上の注意点を普及することにより、生産環境を整備し、需要に応じた芝生産を進めます。

〈「鳥取方式の芝生化プロジェクトチーム」の取組〉

鳥取県では、「環境」をキーワードとした「とっとり発グリーンニューディール」プロジェクトの一環として、緑化産業の振興に取り組んでいます。この取組の中で、子供たちの健全育成を図るため、園庭、校庭、公園等の芝生化を進めようと平成21年度「鳥取方式の芝生化プロジェクトチーム（PT）」を立ち上げました。このPTでは、部局を越えて各課が連携し、芝生化推進関連事業に取り組むものです。



園庭・校庭・公園等の芝生化支援

幼稚園・保育園	小学校	県立学校	公園・広場等
「保育園・幼稚園園庭芝生化促進事業」 57,000千円 子育て支援総室+協働連携推進課 ・公立(子育て支援総室) 37,000千円 補助率10/10 ・私立 20園(協働連携推進課) 1,000千円×20園 補助率10/10	「小学校校庭芝生化モデル事業」 10,500千円 協働連携推進課 3,500千円×3校 単価: 500円/1㎡	「県立学校校庭芝生化推進事業費」 28,136千円 教育環境課 新規芝生化準備(1校) 6,638千円 芝生化作業(2校) 3,975千円 芝生維持管理(11校) 14,533千円 芝生維持管理指導助言(11校分) 2,990千円	「みんなの広場芝生化事業」 8,000千円 公園自然課 補助率1/2(上限1,250千円) 事業主体:市町村 事業実施箇所:都市公園、広場等

実証

県産和芝による芝生化実証等
「日本芝新品種校庭芝生化モデル事業」 5,599千円 生産振興課 ・校庭等芝生化実証実験 4,800千円 (2,400千円×1、1,200千円×2) 実施時期H22-23年 ・既存実施校の事例研究 178千円 ・ティフトン特性検定試験 621千円

PR

芝生化シンポジウムの開催
「鳥取方式の芝生化を考えるシンポジウムの開催補助」 1,200千円 協働連携推進課 ※「鳥取方式の芝生化全国サポートネットワーク」への補助

芝生化の効果検証
「学校の校庭芝生化の効果検証事業」 2,105千円 スポーツ健康教育課 ・連絡協議会 205千円 ・研究機関による調査・分析 1,300千円 ・協力小学校による調査研究協力・活用実践 600千円

鳥取県産芝のPR
「鳥取芝PR事業」 800千円 生産振興課 事業主体:芝生産団体、鳥取県芝生産指導者連絡協議会 「グリーンバードJ」、「ティフトン」を含む本県産芝を県内外に広くPRし、販路拡大を図る。補助率1/2以内

鳥取県芝生産指導者連絡協議会 (平成23年度)

事務局 〒689-2311 鳥取県東伯郡琴浦町中尾504-1
鳥取県芝生産組合 TEL(0858)52-2278

◎役員

会長	盛山 和夫	鳥取県芝生産組合長
副会長	永代 達憲	鳥取中央農業協同組合 琴浦営農センター長
	野々下将夫	有限会社鳥取ターフ 社長
顧問	小松 弘明	東伯農業改良普及所長
	永田 温美	琴浦町役場農林水産課長

◎会員(アイウエオ順)

有限会社下嶋芝生	〒689-3213	鳥取県西伯郡大山町門前1196
有限会社山陰芝	〒689-2305	鳥取県東伯郡琴浦町槻下695
有限会社三立芝	〒689-2305	鳥取県東伯郡琴浦町槻下1054
有限会社ダイエイ芝	〒689-2223	鳥取県東伯郡北栄町大谷1430
大栄芝生産組合	〒689-2224	鳥取県東伯郡北栄町妻波1725-2
有限会社大山芝	〒689-2321	鳥取県東伯郡琴浦町森藤191
株式会社チュウブ緑地	〒689-2304	鳥取県東伯郡琴浦町逢束1061-6
鳥取県芝生産組合	〒689-2311	鳥取県東伯郡琴浦町中尾504-1
有限会社鳥取ターフ	〒689-3403	鳥取県米子市淀江町西原1104-1
有限会社前田商会	〒689-3306	鳥取県西伯郡大山町中高406-1
有限会社山崎芝	〒689-2305	鳥取県東伯郡琴浦町槻下1062-5

◎行政機関

東伯農業改良普及所	〒689-2301	鳥取県東伯郡琴浦町八橋212-1
倉吉農業改良普及所	〒682-0802	鳥取県倉吉市東巖城2 中部総合事務所
大山農業改良普及所	〒689-3303	鳥取県西伯郡大山町所子541-8
農林総合研究所園芸試験場	〒689-2221	鳥取県東伯郡北栄町由良宿2048

鳥取県

(担当) 農林水産部生産振興課野菜・花き担当

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1丁目220番地
電話 0857-26-7272